

## (9) 哺乳類

本調査では鍾乳洞内で休息中のテングコウモリ1群15個体を確認した。本例は県内に存在する最大個体数の記録である。テングコウモリは鍾乳洞などの洞窟と樹洞の両方を休息洞として利用するとされているが、県内での確認は洞窟からのみである。本例鍾乳洞はレンズ状石灰岩中に形成された小規模なものであるが、テングコウモリの個体数が多く生息維持に重要な鍾乳洞であると考えられる。また、この鍾乳洞からはコキクガシラコウモリ、キクガシラコウモリも確認した。「広島市の生物」で情報不足に選定したコウモリ類のうちユビナガコウモリ、オヒキコウモリ、コテングコウモリは確認できなかった。森林性のコテングコウモリは、東郷山山頂周辺などに残るブナ林帯から確認される可能性が高い。

ニホンモモンガはブナ林帯において痕跡を確認した。また、ヤマネは保護個体の記録により確認した。

ツキノワグマは山林内において痕跡を確認した。生息域を分断する大きな集落や道路が少なく、旧湯来町全域に生息していると考えて差し支えないであろう。

「広島市の生物」では環境指標種として、ムササビを挙げた。生息に必要な広葉樹とスギ林が広範囲に存在するため、ツキノワグマ同様に町の全域に生息していると考えられる。

「広島市の生物」では良好な水辺環境に依存する哺乳類としてカワネズミを選定したが、本調査では確認できていない。しかしながら、東郷山をはじめ旧湯来町の山々には広葉樹林が比較的広範に残されており、川岸が自然のまま残された溪流も多く存在するため、今後確認される可能性が高い。

湯来地区の調査による選定種の追加

なし

湯来地区の調査による選定種のカテゴリ変更

なし

湯来地区の調査で確認された選定種（カテゴリ変更なし）

コキクガシラコウモリ 情報不足

テングコウモリ 情報不足

ニホンモモンガ 情報不足

ヤマネ 情報不足

ツキノワグマ 情報不足

ニホンイタチ 情報不足

ムササビ 環境指標種

哺乳類

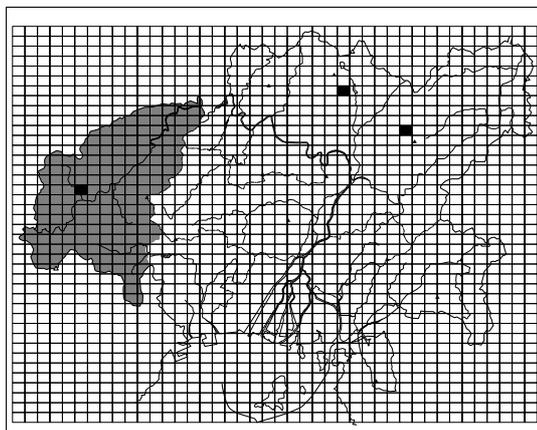
広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

環境省・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

■コキクガシラコウモリ (翼手目 キクガシラコウモリ科)

*Rhinolophus cornutus*

前腕長40mm前後、体重7g前後で、幅が広い翼を持つ洞窟性小型コウモリ。全身が茶褐色であるが、飛膜の方が色が濃く、体躯部分の体毛は比較的白っぽく見える。ほぼ全国に分布し、鍾乳洞や廃坑などの洞窟をねぐらとして利用する。洞窟内では数百頭単位の群れを作ることも多い。ねぐらとして利用する場所は、他の洞窟性コウモリより暖かい深部を選ぶ傾向がある。森林内で採食し、開けた空間へは出たがらないため、ねぐら場所の洞窟は採餌場所の森林内に存在、もしくは隣接している。



哺乳類

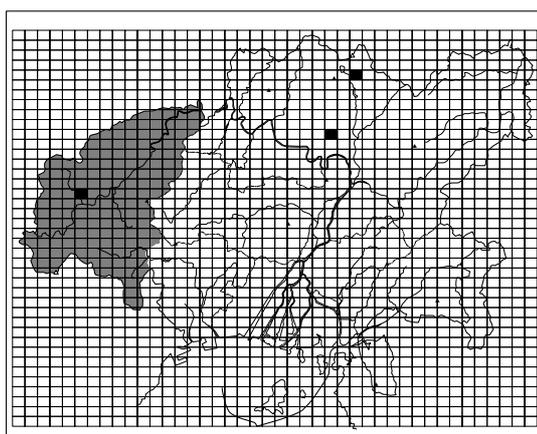
広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

環境省・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

■テングコウモリ (翼手目 ヒナコウモリ科)

*Murina leucogaster*

前腕長42～45mm前後、体重10～15g程度。鼻孔部が管状に突出し、テングコウモリの名の由来となっている。比較的幅が広い翼を持ち、腿間膜の背面には全面に背部と同様の長い毛が密に生えている。背面の刺毛は先端が金属光沢を持つ黄色で、全体として灰色から黄褐色に見える。森林性のコウモリで、ねぐら場所として洞窟と樹洞のどちらをも使うことが知られているが、県内では樹洞からの報告はない。



哺乳類

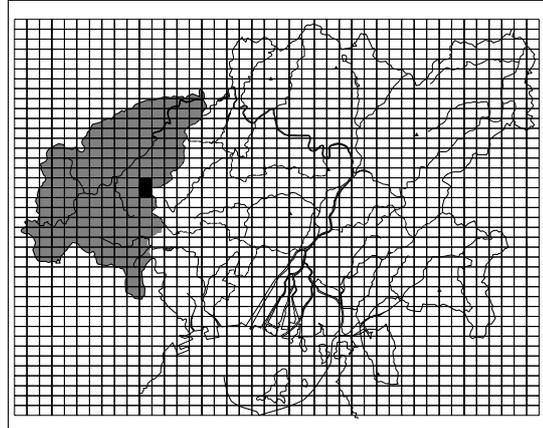
広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

環境省・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

■ニホンモモンガ（げっ歯目 リス科）

*Pteromys momonga*

ムササビのように前後肢の間に発達させた皮膜を広げ、滑空する小型のリスの仲間。頭胴長は17cm、尾長は12cmほどにしかならない。県内では1993年に初めて確認された。それまでは小型で動きがすばやい上に、夜行性であることが重なり存在が明らかにされていなかった。生息環境として、スギやモミが混生するブナ林を好むと考えられる。県東部からの報告はない。



哺乳類

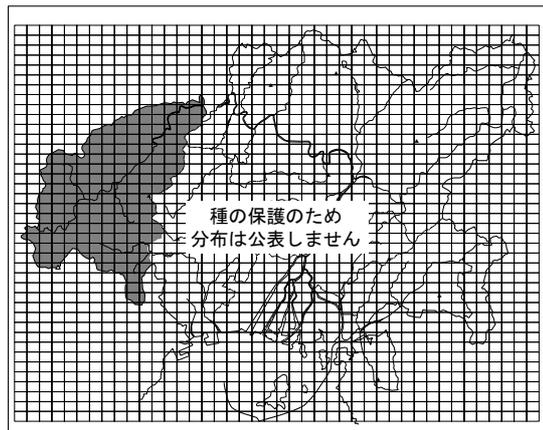
広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

環境省・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

■ヤマネ（げっ歯目 ヤマネ科）

*Glirulus japonicus*

頭胴長7cm、尾長5cm、体重20g程度の小型の齧歯類。ほぼ全身が黄土色の毛に覆われ、首から臀部にかけ1本の茶褐色の帯がある。樹上生活に特化し、移動には枝先を伝い歩く。昆虫を主食とするが、木の実などを食べることも多い。樹洞に苔を持ち込みねぐらとし、その中でボール状に丸まって冬眠する。気温の低下に敏感に反応し、半年近くを冬眠してすごす。県東部からの報告はない。



哺乳類

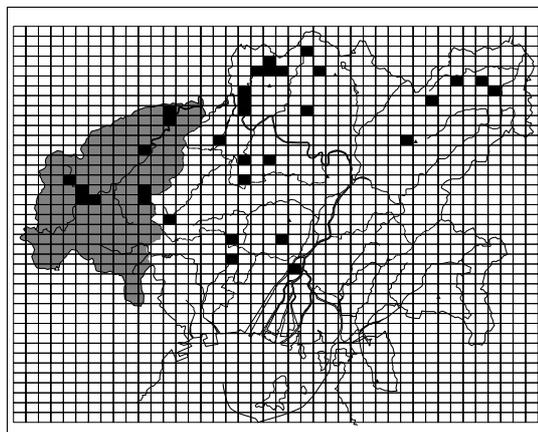
広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

環境省・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

■ツキノワグマ（食肉目 クマ科）

*Selenarctos thibetanus*

アジアに広く分布する小型のクマで、頭胴長は1.3m程度、体重は雄が70～80kg、雌では50～60kg程度である。日本には本州、四国、九州に分布していたが九州では絶滅、四国でも数十頭しか生息していないと考えられている。本州全体では絶滅の危険はないと考えられるが、西中国山地の個体群は危機的状況にあるとっている。ほぼ全身が黒い毛に覆われ、胸に三日月型の白斑があることが多いことからツキノワグマと呼ばれる。



哺乳類

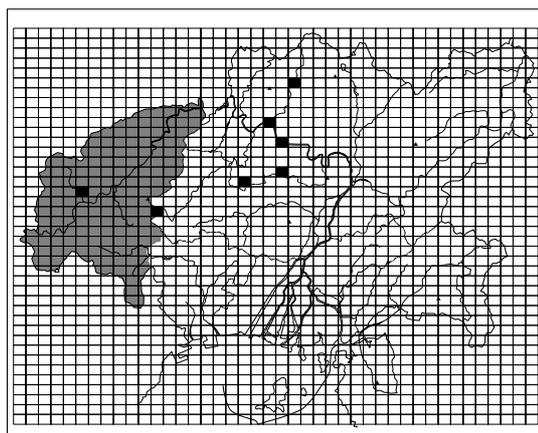
広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

環境省・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

■ニホンイタチ（食肉目 イタチ科）

*Mustela itatsi*

体躯は細長く、四肢が短い。国内産哺乳類の中では性的二形としての体格差が最も大きく、雌に対して、雄の大きさは頭胴長で約2倍、体重だと5倍もの差がある。頭胴長に対する尾の長さ(尾率)が50%を超えることはなく、50%を超える尾率を持つタイリクイタチ(移入種)との区別は容易である。雄は護岸されていない水辺環境を好み、カエルや魚類、ムカデなどを好んで捕食することが知られている。また、雄と比べ雌の発見例が極端に少なく、雄とまったく異なった生活パターンを有している可能性が指摘されている。



## (10) 鳥類

東郷山や、大峯山、天上山などの900mから1,000mの山々には比較的良好な広葉樹林が残されており、ヤマドリやアオバト、クロツグミ、ゴジュウカラなどを確認した。また、それらの鳥類を餌とするクマタカの姿も見られた。秋の渡りの時期には大峯山の上空でノスリやハイタカ、ハリオアマツバメなどの渡りを確認した。一方、佐伯区湯来町麦谷地区門出口や和田地区の溪畔にはみごとなスギの人工林が見られるが、広葉樹が少ないので、溪畔のスギ林に生息していることが多いヤイロチョウやサンコウチョウ、クロツグミなどの生息が確認できなかった。これらの林にはヤマセミ、ミソサザイ、オオルリなどが生息していた。また、1991年にヤイロチョウの巣立ち直後の雛が保護された佐伯区湯来町多田地区でも、今回の調査ではヤイロチョウの生息を確認できなかった。比較的良好な広葉樹林が残されている佐伯区湯来町多田地区本多田ではジュウイチやカッコウ、ホトトギスなどの托卵鳥を確認し、この地区にはこれらの托卵鳥の宿主となるウグイスやオオルリ、モズなども繁殖している。

水辺の鳥類としては、<sup>みのち</sup>水内川や八幡川の支流にはカワガラスやヤマセミ、カワセミなどの溪流性の種が見られ、冬季には魚切ダムの上流でオシドリを確認した。

また、今回の調査では確認できなかったが、聞き取り調査により、サンコウチョウとアカショウビンが<sup>しらさぎ</sup>白砂地区上<sup>ゆずりは</sup>欄で確認されている。また、アオバズクが和田地区湯ノ山で、フクロウが伏谷地区大畑で確認されている。

今回の見直しでは選定種の追加はなかったが、前回調査では環境指標種に選定されていたアオバズク、フクロウの2種を情報不足にカテゴリを変更した。

アオバズクとフクロウは営巣場所となる大径木の樹洞が少なくなっているため、市域における両種の繁殖個体数が減少傾向にある。このため、カテゴリの変更を行った。

湯来地区の調査による選定種の追加

なし

湯来地区の調査による選定種のカテゴリ変更

アオバズク 情報不足←環境指標種

変更理由：餌となる大型昆虫が生息する農耕地や、営巣場所となる樹洞を有する大径木が減少しているため、市域における繁殖個体数が減少傾向にある

フクロウ 情報不足←環境指標種

変更理由：餌となるネズミ類やカエルが生息する農耕地や、営巣場所となる樹洞を有する大径木のある林が減少しているため、市域における繁殖個体数が減少傾向にある

湯来地区の調査で確認された選定種（カテゴリ変更なし）

ハイタカ 情報不足

クマタカ 情報不足

ヤマドリ 情報不足

## 鳥類

### 広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

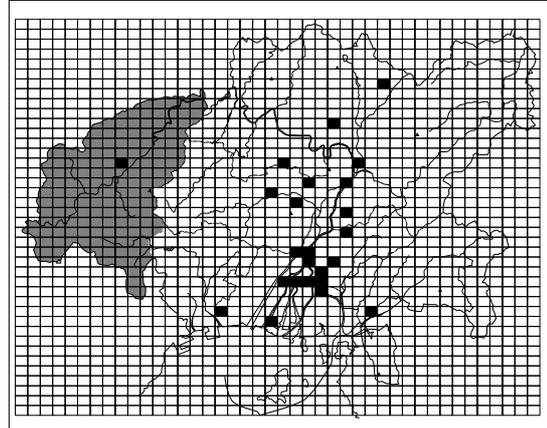
環境省・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

#### ■アオバズク（フクロウ科）

##### *Ninox scutulata*

夏鳥として日本に渡来し、農耕地や民家のそばの林で繁殖する。全長27～30cm，体は黒褐色で目は金色。コウモリ，昆虫などを餌とする。

市域では安佐北区や東区，佐伯区湯来町でも繁殖が確認されているが，長年繁殖していた場所で繁殖しなくなった例も増えている。営巣している大径木や建物の保全が重要である。



## 鳥類

### 広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

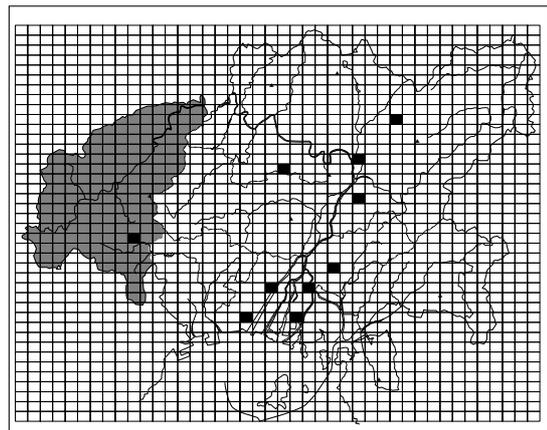
環境省・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

#### ■フクロウ（フクロウ科）

##### *Strix uralensis*

九州以北に留鳥として生息し，社寺林や山林に生息する。全長48～52cm，耳羽はなく，体には灰白色，黒色，褐色の複雑な斑紋がある。ネズミやカエル，小鳥などを餌とする。

市域中心部に近い社寺林にも生息しているが，繁殖記録は少ない。繁殖には大きな樹洞が必要であるが，大きな樹洞のある大径木が減少しているので，繁殖個体数の減少が懸念される。



## 鳥類

### 広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

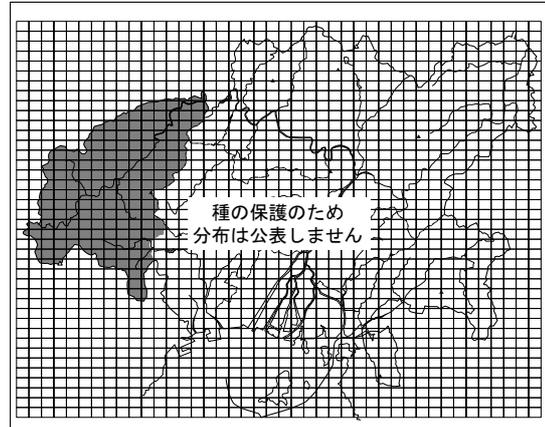
環境省・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

#### ■ハイタカ (タカ目 タカ科)

##### *Accipiter nisus*

本州中部以北の山地で繁殖し、県内には冬鳥として渡来し越冬する。メスは全長約39cm、オスは全長約31cm。黒褐色の背中に橙色の腹。メスの腹は白色で褐色の横縞がある。アトリやカシラダカなどの小鳥を捕らえて餌とする。

冬季には市域の農耕地や山林で見られるが、繁殖期には確認されていない。



## 鳥類

### 広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

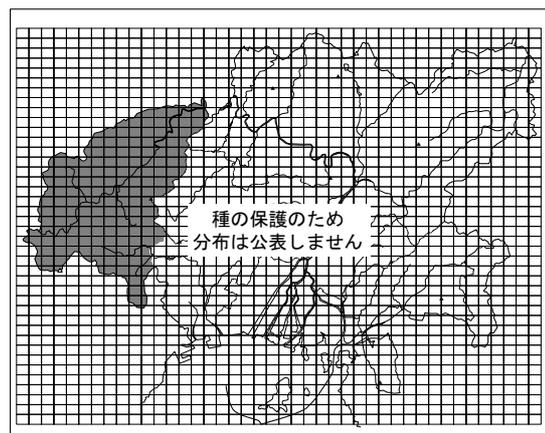
環境省・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

#### ■クマタカ (タカ目 タカ科)

##### *Spizaetus nipalensis*

国内に留鳥として生息する。メスは全長約80cm、オスは全長約70cm。翼開長140~165cm。背中は黒褐色で、腹は白っぽい。後頭部に冠羽がある。ノウサギやヤマドリ、ヘビ類などを捕らえて餌とする。

市域では安佐北区と佐伯区に生息し、繁殖も確認されている。個体数は少ない。営巣に必要な大木のある森林や、営巣地周辺の環境を保全することが重要である。



## 鳥類

### 広島市の絶滅のおそれのあるもの・情報不足

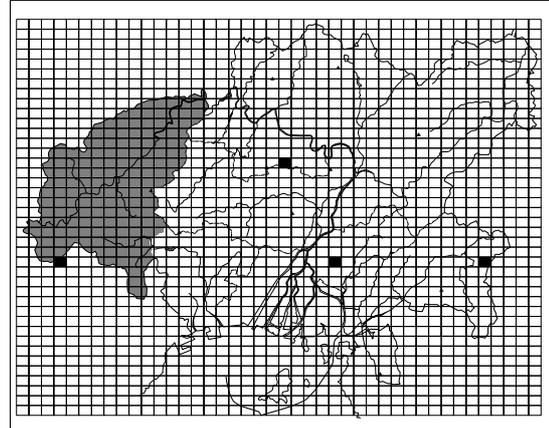
環境省・県RDB種あるいはそれに相当する種で現状が不明である

#### ■ヤマドリ (キジ目 キジ科)

##### *Phasianus soemmerringii*

本州，四国，九州に留鳥として生息する。オスは尾が長く全長約125cmで赤銅色。メスは尾が短く全長約55cmで茶褐色。植物の種子や葉，昆虫などを餌とする。

市域の山林に生息しているが，個体数は少ない。



## (11) 爬虫類

今回の調査では、以前からの調査を含めて、シマヘビ、カナヘビを確認した。

爬虫類は生息場所を特定することが難しく、確認は偶然性が大きい。また、餌となる両生類、特にカエル類の調査が充分できていないので、普通種と考えられる種の状況も不明である。

前回の調査ではタワヤモリとタカチホヘビが選定されているが、タワヤモリは瀬戸内海沿岸に近い岩場の節理面を主な生息場所としており、湯来町域は生息に適さないと考えられる。逆に、タカチホヘビは比較的自然度が高い環境に生息することから、生息の可能性が残されている。いずれにせよ、個体の確認ができていないので、カテゴリは変更しなかった。

湯来地区の調査による選定種の追加

なし

湯来地区の調査による選定種のカテゴリ変更

なし

湯来地区の調査で確認された選定種（カテゴリ変更なし）

なし

## (12) 両生類

今回の調査では、以前からの調査を含めて、オオサンショウウオ、ブチサンショウウオ、トノサマガエル、タゴガエル、シュレーゲルアオガエルを確認した。早春の調査では、ニホンアカガエル、ヤマアカガエル、ニホンヒキガエルの産卵確認を行なったが、成体・卵塊とも発見できなかった。旧湯来町の環境は急峻な場所に水田が多く、特に山田では、最上部がイノシシ被害を防ぐためのトタン柵が張り巡らされており、産卵場への移動が困難になっていることが多い。また、移動可能な場合でも、最上部は放棄水田となり、草地化し、産卵のための水溜まりもほとんど無い状態が多かった。また、平地では大型機械導入のための冬季の乾田化がすすんでおり、産卵場となる環境はほとんどなかった。逆に、<sup>さんろく</sup>山麓部は自然度が高く、小さな水溜りなどを利用してヤマアカガエル、ニホンヒキガエルは繁殖しているのではないかと推測された。

前回の調査ではニホンヒキガエル、オオサンショウウオ、ニホンアカガエル、ヌマガエルが選定されている。前述したように、ニホンヒキガエル、ニホンアカガエルは確認できなかった。オオサンショウウオは水内川<sup>みのち</sup>の下流域で確認したが、全長が60~131cmと大きく老成した個体と考えられ、卵塊や幼生は発見されなかったことから、産卵場の喪失に伴い、絶滅直前の状況にあるのではないかと推測された。ヌマガエルは比較的温暖な瀬戸内沿岸に生息することから、旧湯来町では生息していないものと推測された。

検討の結果、旧湯来町を除く市域での状況も考慮してトノサマガエルを環境指標種に選定した。

トノサマガエルは水田や用水路などを主な生息環境としているが、基盤整備事業や用水路のコンクリート化に伴い、生息環境を失い、個体数が減少している。トノサマガエルは水田やハス田という環境を利用して個体数を維持していたと推測されるが、水田の喪失により、また、稲作の作付け方法の改変(田植えが時期的に早くなった)により生活史がかみ合わなくなっているのではないかと推測される。環境が復活し、安定すれば、個体数の回復も見込める。

湯来地区の調査による選定種の追加

なし

湯来地区の調査による選定種のカテゴリ変更

トノサマガエル 環境指標種←自然誌構成種

変更理由：個体数が減少しているため

湯来地区の調査で確認された選定種（カテゴリ変更なし）

オオサンショウウオ 準絶滅危惧<sup>△</sup>

## 両生類

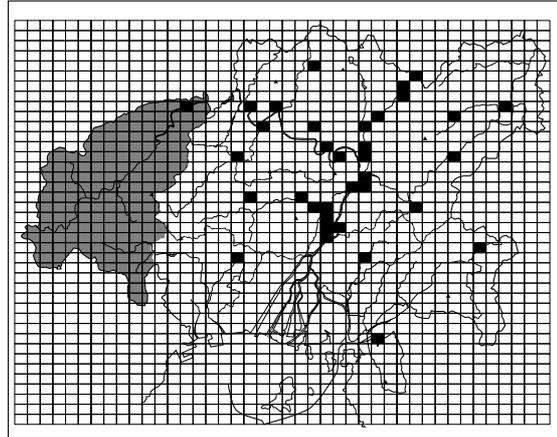
### 広島市の絶滅のおそれのあるもの・準絶滅危惧

現時点での危険度は小さいが絶滅危惧に移行する可能性が大きい

#### ■オオサンショウウオ（サンショウウオ目 オオサンショウウオ科）

##### *Andrias japonicus*

本州の岐阜県以西、四国、大分県に分布する。全長が1mを越える個体もいる。繁殖している河川が全国的に減少しており、市域の確実な繁殖地は不明である。佐伯区湯来町では、水内川みのちの下流域で確認した。老成した個体がほとんどで、繁殖していないことから、この状態が続けば絶滅の可能性が高い。また、河川構造物が遡上・移動を妨げたり、袋小路に入り込み、出られなくなり、水位が下がって死滅した個体が見られた。



### (13) 淡水魚類

今回の調査では、以前からの調査を含めて、スナヤツメ、ウナギ、ゴギ、サツキマス降海型(アマゴ河川残留型)、アユ、ウグイ、タカハヤ、カワムツB、オイカワ、カマツカ、ムギツク、ズナガニゴイ、コイ、ギンブナ、シマドジョウ、イシドジョウ、アカザ、オヤニラミ、ドンコ、カワヨシノボリを確認した。この中でゴギ、アマゴ、アユは放流個体だと思われる。

前回の調査ではゴクラクハゼ、シラウオ、ヤリタナゴ、イシドジョウ、アカザ、スミウキゴリ、カジカ、ワカサギ、サツキマス、アブラボテ、メダカ、オヤニラミ、ウキゴリ、スジシマドジョウ、ドンコ、スナヤツメを選定しているが、ゴクラクハゼ、シラウオ、スミウキゴリ、ウキゴリ、ワカサギは汽水域上限近くに生息することから、旧湯来町の調査域には生息しないと考えられる。また、ヤリタナゴ、アブラボテは生きた淡水二枚貝に産卵することから、淡水二枚貝の生息しない水内川には分布していないものと思われる。逆にイシドジョウ、アカザ、サツキマス、オヤニラミ、ドンコ、スナヤツメは確認していることから、未確認魚種はカジカ、メダカ、スジシマドジョウの3種である。

近年の河川状況からすると、カジカが生息する可能性は低く、メダカ、スジシマドジョウは個体数は少ないものの、生息している可能性は高い。

湯来地区の調査による選定種の追加

なし

湯来地区の調査による選定種のカテゴリ変更

なし

湯来地区の調査で確認された選定種 (カテゴリ変更なし)

イシドジョウ 絶滅危惧

アカザ 絶滅危惧

サツキマス 準絶滅危惧

オヤニラミ 準絶滅危惧

ドンコ 軽度懸念

スナヤツメ 絶滅危惧

## 淡水魚類

### 広島市の絶滅のおそれのあるもの・絶滅危惧

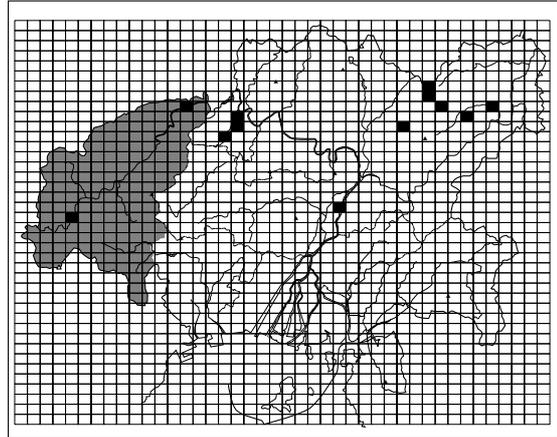
近い将来に広島市で個体群の存続が危ぶまれる

#### ■イシドジョウ（コイ目 ドジョウ科）

##### *Cobitis takatsuensis*

西日本の中・上流域に分布し、中国，四国，九州から報告がある。全長6～7cm，体色は黄色に黒い体側斑紋がある。瀬尻の礫底の間隙に生息する。

広島県では、太田川水系と江の川水系に局限される。水内川水系では、下流の下地区小原と中流の多田地区来栖根より確認されている。個体数は極めて少ない。2004年の台風14号で土砂が流れ込み、礫間を埋めたため、河川環境が一変した。



## 淡水魚類

### 広島市の絶滅のおそれのあるもの・絶滅危惧

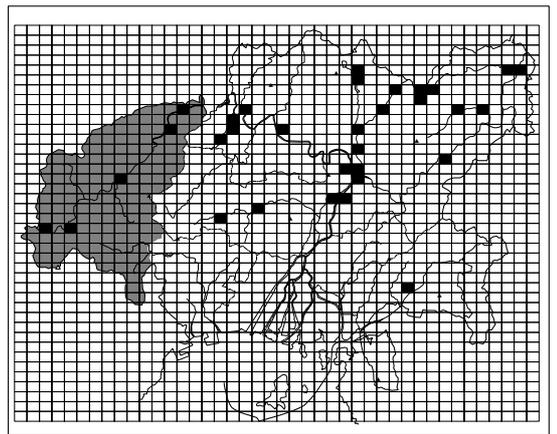
近い将来に広島市で個体群の存続が危ぶまれる

#### ■アカザ（ナマズ目 アカザ科）

##### *Liobagrus reini*

宮城県と秋田県を北限とする本州，四国，九州に分布し，河川の中・上流域の瀬の礫底に生息している。全長10～15cm，体色は赤褐色で，夜行性。

太田川水系に生息し，八幡川や瀬野川ではみられなくなった。太田川の支流の水内川では，下流の下地区小原から中流の水内，上流域支流の本多田川より確認している。水量の減少，水質汚染，農薬等の影響で著しく減少している。



## 淡水魚類

### 広島市の絶滅のおそれのあるもの・準絶滅危惧

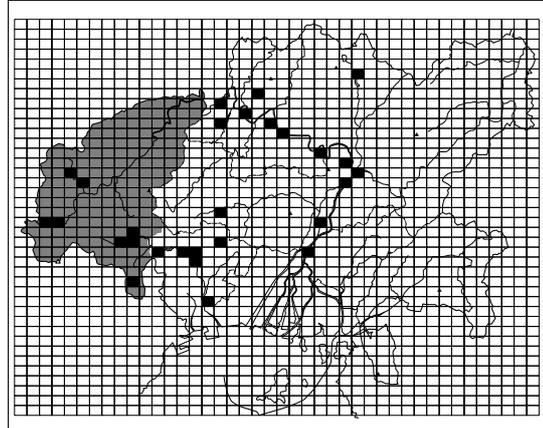
現時点での危険度は小さいが絶滅危惧に移行する可能性が大きい

#### ■サツキマス（サケ目 サケ科）

##### *Oncorhynchus masou ishikawae*

伊勢湾，大阪湾，土佐湾，瀬戸内海で確認されている。海に降海したものをサツキマス（降海型），湖に降湖したものをサツキマス（降湖型）とし，一生河川で成長するものを（サツキマス 河川残留型）と区別しているが，全て同種。

佐伯区湯来町では水内川<sup>みのち</sup>漁協によって，水内川の中・上流域にアマゴが放流されており，天然個体とは区別がつかなくなっている。降海型は下地区小原で確認した。また，以前からの調査では，中国電力の高山川取水口直下まで，また降水量の多い年には井手が原堰直下まで遡上している。降海型は全長25～35cm，0.5～1kg，晩秋に降海し，翌年5～6月に母川回帰する。



## 淡水魚類

### 広島市の絶滅のおそれのあるもの・準絶滅危惧

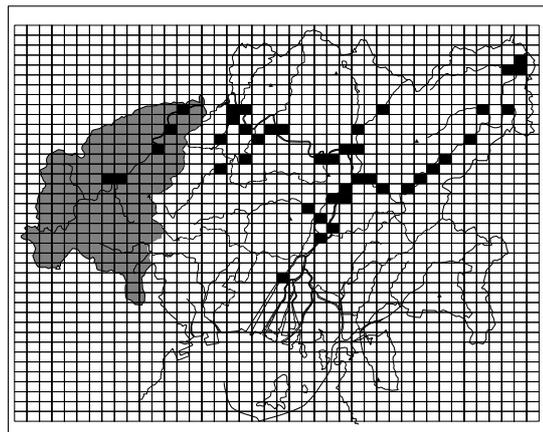
現時点での危険度は小さいが絶滅危惧に移行する可能性が大きい

#### ■オヤニラミ（スズキ目 スズキ科）

##### *Coreoperca kawamebari*

京都府を東限とする本州，四国の一部（徳島県，香川県）と福岡県，熊本県を南西限とする分布域。全長5～7cm，鰓ぶたに緑色の小斑紋がある。

水内川<sup>みのち</sup>水系では下流域から中流域まで広く分布している。個体数も多い。淀みにあるツルヨシのランナーなどに産卵するため，河川勾配の小さい水内川<sup>みのち</sup>は好環境と思われる。



## 淡水魚類

### 広島市の絶滅のおそれのあるもの・軽度懸念

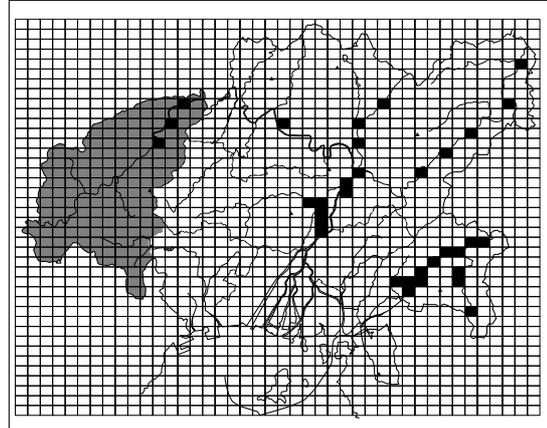
環境省・県RDB種あるいはそれに相当する種で存続基盤が比較的安定している

#### ■ドンコ (スズキ目 ハゼ科)

##### *Odontobutis obscura*

本州西部，四国，九州に分布する。全長15 cm。黒褐色で第一背びれ，第二背びれの基底下方に黒色斑がある。泥底を好み，魚食性。

水内川では下流域から中流域にかけて生息し，個体数は多い。河川勾配の小さい水内川は好環境と思われる。



## 淡水魚類

### 広島市の絶滅のおそれのあるもの・絶滅危惧

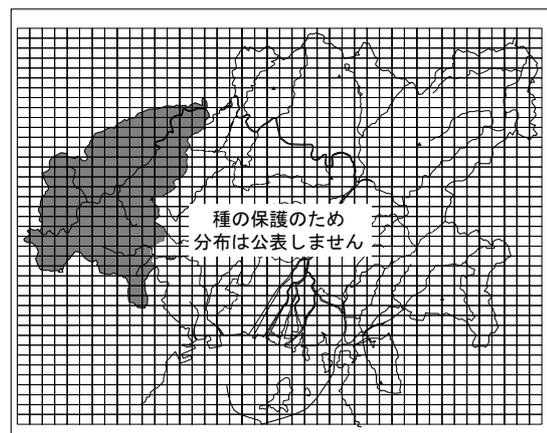
近い将来に広島市で個体群の存続が危ぶまれる

#### ■スナヤツメ (ヤツメウナギ目 ヤツメウナギ科)

##### *Lampetra reissneri*

北海道，本州，四国，九州(宮崎県，鹿児島県を除く)に分布する。幼体は盲目で茶褐色，成体は10～13cm，黄金色の金属光沢を示す。

水内川では中・下流域で確認をしている。特に，中流域では1～2年の幼体を確認していることから，繁殖は継続しているものと考えられる。近年，東日本の個体とは種が異なることが明らかとなった。幼生は泥底に生息するため，近年の河川工事などにより，生息環境を失い，最も絶滅の可能性の高い種である。



#### (14) 昆虫類・クモ類

昆虫類の調査は、調査期間が限られていたため、水内川及びその支流域<sup>みのち</sup>に生息する水生のコウチュウ・カメムシ類と東郷山のアカガシ林に生息する直翅系昆虫類に焦点を絞って実施した。その結果、旧市域においては未記録であったサワダマメゲンゴロウが発見され、生息地が局所的であったナベブタムシ(宇賀峡)、クチキウマ・ハダカササキリモドキ・ヘリグロツユムシ(白木山山頂部、未発表)、ニホントビナナフシ(白木山・呉婆々宇山山頂部、未発表)の生息が確認された。これらのうち、サワダマメゲンゴロウを軽度懸念に、ナベブタムシは宇賀峡における生息数の激減状況を考慮して準絶滅危惧に選定した。他種については、市域における既知産地は限られるものの、アカガシを優占種とする森が保存される限り、生存が危ぶまれることは無いと判断し、選定種に加えなかった。また、佐伯区湯来町多田地区日室の小規模な鍾乳洞にすむキクガシラコウモリの体表から、クモバエ科に属する種不明の1種と *Brachytarsina kanoi* を採集することができた(未発表)。しかし、*B. kanoi* は広島市南区金輪島においてもキクガシラコウモリから得られており(未発表)、クモバエ科の不明種についても他所で採集される可能性が高いと判断されるため、これらも選定種に加えなかった。

湯来地区の調査による選定種の追加

ナベブタムシ 準絶滅危惧

サワダマメゲンゴロウ 軽度懸念

湯来地区の調査による選定種のカテゴリ変更

なし

湯来地区の調査で確認された選定種 (カテゴリ変更なし)

なし

昆虫類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・準絶滅危惧

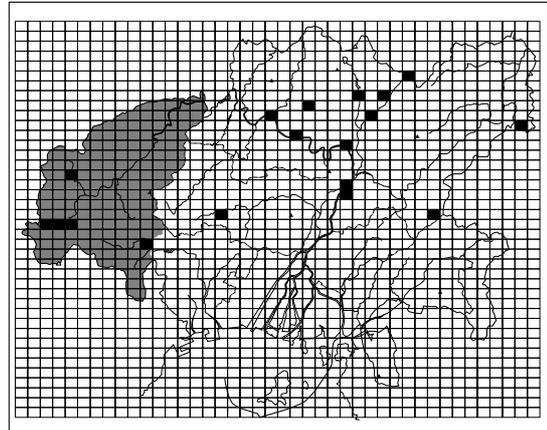
現時点での危険度は小さいが絶滅危惧に移行する可能性が大きい

■ナベブタムシ (カメムシ目 ナベブタムシ科)

*Aphelocheirus vittatusi*

本州，四国，九州に分布する。清浄な河川の中～上流域に生息し，流れのある部位の水底の砂中から発見される。体長約9mm。

水内川水系の上流域の本流及び支流の4か所で得られた。旧市域における確実な生息地である宇賀峡においても，近年，個体数の減少が著しい。いずれの生息地においても，今後，豪雨による水辺環境の悪化に伴う著しい個体数減少が懸念される。



昆虫類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・軽度懸念

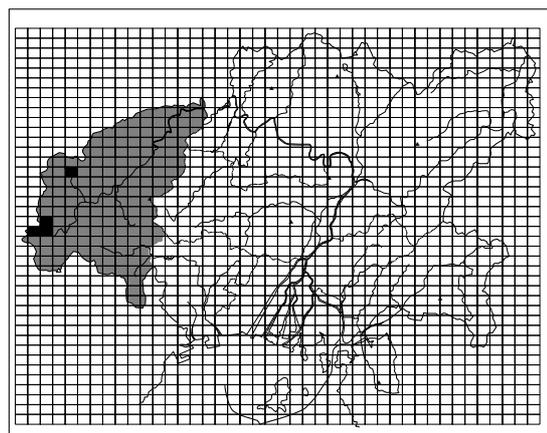
環境省・県RDB種あるいはそれに相当する種で存続基盤が比較的安定している

■サワダマメゲンゴロウ (コウチュウ目 ゲンゴロウ科)

*Platambus sawadai*

北海道，本州，四国，九州に分布する。河川の上流域に生息し，岸辺の湿生植物の根際や，淀みの水面に浮かぶ落葉の間などから発見される。体長7.9～9.1mm。

水内川水系の中～上流域の本流及び支流の4か所でモンキマメゲンゴロウとともに得られたが，採集された個体数は本種の方が圧倒的に少数であった。清流域に広く生息しているものと推測されるが，今後，豪雨による水辺環境の激変による著しい個体数減少が懸念される。



(15) 甲殻類・貝類

甲殻類は文献調査の結果、ヨコエビ、モクズガニ、サワガニの記録があった。

貝類は文献調査の結果、カワニナ、ハンジロギセル、サンインマイマイ、ヤマトシジミ、マシジミの記録があった。

検討の結果、今回の調査による選定種の追加及びカテゴリ変更はしなかった。

湯来地区の調査による選定種の追加

なし

湯来地区の調査による選定種のカテゴリ変更

なし

湯来地区の調査で確認された選定種（カテゴリ変更なし）

ハンジロギセル 準絶滅危惧

貝類

広島市の絶滅のおそれのあるもの・準絶滅危惧

現時点での危険度は小さいが絶滅危惧に移行する可能性が大きい

■ハンジロギセル（柄眼目 キセルガイ科）

*Pinguiphaedusa hemileuca hemileuca*

中国地方の特産種で、社叢などの樹幹や落葉下に生息する。殻高15～20mm，殻径3～4mm。殻は左巻でキセル形。県下の分布は西部に偏る。

市域では福王寺山，極楽寺山，白木山に生息し，福王寺山，極楽寺山の生息環境は比較的良好に保たれている。白木山では最近の記録がない。福王寺山でも減少傾向にある。佐伯区湯来町では，東郷山，和田地区恵下で記録があるが現状は不明である。

